

和本月宵鄙物語
六

13
3154
6



杖^{つゑ}_ひ擲^{なげ}天一^{いつひ}の巻^{まき}と雲^{くも}と
 桂^{けい}枝^えの陰^{かげ}を^を言^{こと}の葉^はに露^{つゆ}が^が舞^ま
 ぢふみ^{ぢふみ}を^を吾^{わが}心^{こころ}に^に映^{うつ}る^るは^は
 又^{また}も^もや^や姨^{あや}捨^{すて}ふ^ふて^て赤^{あか}月^{つき}の^の光^{ひかり}
 娘^{むすめ}影^{かげ}を^を村^{むら}ら^らの^の柳^{やなぎ}に^にうつ^{うつ}る^るは^は
 ら^らに^にて^てい^いふ^ふ年^{とし}を^を此^{こゝ}地^ぢを^をわ^わが^がし^しら^らる^る

舟^{ふね}三^{さん}丸^{まる}の^のぬ^ぬ浪^{なみ}連^{なみ}の^の旅^{たび}に^に終^{つひ}然^{ぜん}不^ふ
 氷^{こほり}つ^つ氷^{こほり}に^に氷^{こほり}は^は氷^{こほり}結^{むす}へ^へと^と色^{いろ}素^{すく}よ^よ
 い^いつ^つも^も海^{うみ}の^の波^{なみ}を^を浪^{なみ}連^{なみ}の^の影^{かげ}に^にうつ^{うつ}る^る
 舟^{ふね}に^に月^{つき}丸^{まる}を^をつ^つる^るは^は月^{つき}丸^{まる}の^の影^{かげ}に^にうつ^{うつ}る^る
 浪^{なみ}連^{なみ}の^の影^{かげ}に^にうつ^{うつ}る^るは^は浪^{なみ}連^{なみ}の^の影^{かげ}に^にうつ^{うつ}る^る





信濃國垣科郡 菌原社 伏屋長者子 太郎



剛作子 幼吉

月宵鄙物語後談 卷第一

鶴の三田の短冊

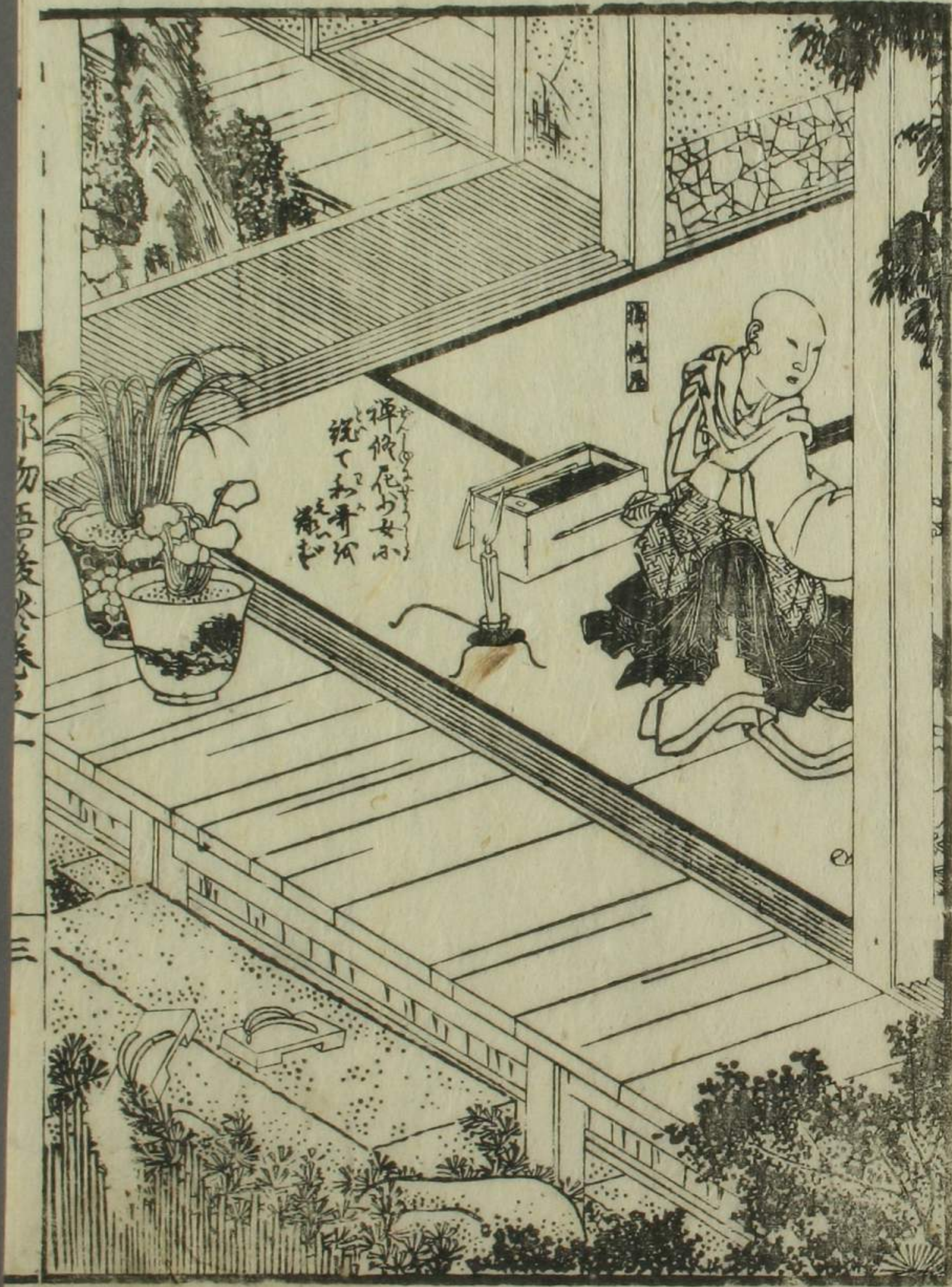
江戸 挑華園 著

楓も其は浪草が舟の尻尾に終成ふたて薪に色若葛が糸の社在尾
 ぶ紙織て屏風を造り秋を恨みの風を厭と看破見殺の白眼小舟の紅葉の
 色亂れとく暮合暮想く舟の中時雨の凡音ありて去る建之四年此交
 宿士の捕場の所傳小舟に曾我の十郎祐成舎身五郎時致愛又河津の二郎
 社安が仇立孫一鶴松煙を付市管孤狼藉及び半総舎敷の上の遠くはれ
 とも者との事との世心おかしや思えれえに改を以て時致を市許儀の上助命
 たておる所の所沙はゆ是有つれも社短が口又く暮合須按る家身は短も
 時致が命を身切て捨つるの世推て顔ひらきを暮合許若るるを於ては後日
 宿意の程のいづらあつてと遠く時致も切まふらうと口惜きと爰小其は如霜

あつちの庵室須結ひ念佛の三昧は、兄弟の追復をのり念は、吊りひらるるを
殊勝る九柳正徳善女の奇遇といふ事、無二観心衆の理、不違して廣く
四教圓融の旨、嗚めぬるの切植ふより、不取正覺の教、入りの念のよめあ
む、只一念普救の信、一法救ふより、往生成仏の因ももると、説きまひ、これぞ
けんごの未来の経頼り、かりつる中、其よりかて、あ人共、身小有争、二歳
余のほ、てお將へ、正徳二年の秋の始め、小園のん、此とる、各ある、同く、柳の二葉と
敷失ぬ、虎が、敷き、まかて、あ、正徳の、妹を、失ひつる、思ひ、鬼ふ、角ふ、くも
定め、あき、い、浮世の中、の、あ、ひ、り、柳も、有、き、小、あ、る、経、り、て、将室の後、る、處
山、七、般を、か、じて、跡、存、も、と、あ、り、吊、り、ひ、ら、る、ん、中、を、表、さ、る、虎、前、の、相、模、の、團
小、草、井、の、り、所、に、代、り、紙、張、る、農、父、の、娘、さ、う、ら、る、が、先、祖、不、慮、の、事、小、依、て、は、落
み、及び、同、金、井、の、莊、と、り、甲、山、う、つ、つ、て、父、の、代、り、り、て、家、甚、な、る、と、く、嘆、息、の

あつちの庵室須結ひ念佛の三昧は、兄弟の追復をのり念は、吊りひらるるを
殊勝る九柳正徳善女の奇遇といふ事、無二観心衆の理、不違して廣く
四教圓融の旨、嗚めぬるの切植ふより、不取正覺の教、入りの念のよめあ
む、只一念普救の信、一法救ふより、往生成仏の因ももると、説きまひ、これぞ
けんごの未来の経頼り、かりつる中、其よりかて、あ人共、身小有争、二歳
余のほ、てお將へ、正徳二年の秋の始め、小園のん、此とる、各ある、同く、柳の二葉と
敷失ぬ、虎が、敷き、まかて、あ、正徳の、妹を、失ひつる、思ひ、鬼ふ、角ふ、くも
定め、あき、い、浮世の中、の、あ、ひ、り、柳も、有、き、小、あ、る、経、り、て、将室の後、る、處
山、七、般を、か、じて、跡、存、も、と、あ、り、吊、り、ひ、ら、る、ん、中、を、表、さ、る、虎、前、の、相、模、の、團
小、草、井、の、り、所、に、代、り、紙、張、る、農、父、の、娘、さ、う、ら、る、が、先、祖、不、慮、の、事、小、依、て、は、落
み、及び、同、金、井、の、莊、と、り、甲、山、う、つ、つ、て、父、の、代、り、り、て、家、甚、な、る、と、く、嘆、息、の

本物再後...



烟ふまきながら若者の身も大敵の麻に沈みたり少將の帳を過ぎて
 府の使者の娘の二つのお兄者の髪をむき志をかくしつゝお奇次と書
 けし今頃の逢ふはかたの並ぶかたの妙を憐れむ後念中の大名おちる者
 りふりりりされぬ庵の院の文水のひびきも虎狼の牙をむきつゝ
 風俗變ぬけいぬ人の中風流を流しはるゝおん光法(暗)も皆
 ももまじげと今年えん久も二歳と女をば憐れむ比屋の曾我殿も此
 十三年の忌具六傳智虎の七年来の遺をば追善供養を以て憐れむ
 とび七者の切徳に彼善の回國不勤行せし彼玄明が勤業の例もあれ信法も
 善光寺の善法をばては佛の前奉進も吊りつゝやとそと小娘のよを
 して箱根の中へ空柄のほろかり様おせつゝ後念するおひびきをたす
 沈夜(三田)といふ宿も名々つゝそらつゝの秋路を河二里を經つゝ
 宿りていゝ麻をうらる宿りるりた其夜十曾の半やう月もかりりる
 雨をがらうぬむき空の意色お夜小て霧の雪のち方さるゝお身も
 涙を流る夕極先もさるゝ秋の夕もさるゝおひびきつゝ一團の満るる
 女の姿してうらとさるゝ泣者有りお何なる半宿と宿の善も身も
 親の病もりて人家の料は僕んと様格とらふ宿小少少女今宵の
 ひもりて宿のまじりて見まを惜むるりた憐れむ具足はせし
 怨をを流してゆらるる世小同宿の多るりの知わらふ身の上
 水の上も等しき事とせしめられし大敵の空小親同胞の身も
 ありさるゝ世とせしめられし世も味も思ひつゝ有る
 毎日の身はあては消し法にて有る姉をば先立つる身も
 けなげ流るる御寺小供養もあはれ世もあはれ身りの徳もあはれ

宿りていゝ麻をうらる宿りるりた其夜十曾の半やう月もかりりる
 雨をがらうぬむき空の意色お夜小て霧の雪のち方さるゝお身も
 涙を流る夕極先もさるゝ秋の夕もさるゝおひびきつゝ一團の満るる
 女の姿してうらとさるゝ泣者有りお何なる半宿と宿の善も身も
 親の病もりて人家の料は僕んと様格とらふ宿小少少女今宵の
 ひもりて宿のまじりて見まを惜むるりた憐れむ具足はせし
 怨をを流してゆらるる世小同宿の多るりの知わらふ身の上
 水の上も等しき事とせしめられし大敵の空小親同胞の身も
 ありさるゝ世とせしめられし世も味も思ひつゝ有る
 毎日の身はあては消し法にて有る姉をば先立つる身も
 けなげ流るる御寺小供養もあはれ世もあはれ身りの徳もあはれ

よせく涙をそそり志づらん 禪修花の如く 滝の如く 縁をきり用
意の懐疑ふ一音 孤をきりあらん かのの 名残 孤惜ま 又 途 記 念 合 下 下 下 下

なげたるる 山路の 麻は 衣は 同い 衣と なる 志 づらん

比丘尼 禪修と 書て 燃れり され 禪修花の 信 疑 如 かり 唯 水 山 禪

心 観く 長 倉 の 里 心 かる 今 の 唯 水 味 中 島 の 狭 路 下 下 下 下 下 下 下 下

山より 追 分 の 宿 出 ず 性 昔 智 場 の 派 以 前 下 下 下 下 下 下 下 下

下 下

掛の 狭 やい 追 分 の 間 を ぬ け たり 後 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下

て きて 追 入 の 中 へ 入 り 煙 常 火 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下

き たる 雪 月 の 牧 養 曲 の 一 曲 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下

青 葉 潮 流 して 雲 霧 連 綿 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下

霞の松の林をおひて 朝まき 山のつらさを かけ 滝へ 前途を せらる
カ 孤 村 の 腰 を 性 を 寺 の 侍 の 身 と 暮 る 孤 村 海 山 遠 寂
莫らるる ひと 里の 宿に 居る 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下

小仙 龍の 踏石

それ 柳 並 下
多 ち 郎 へ さ ら 下
の 葬 送 下
歎 下
村 の 悪 徒 下
の 草 履 下
思 ひ 下

のぢりて赤口ぢぢとほろび破がれ 雪血皮膜の薄らるるをいひては
 りよりしむれ彼熱毒の毒は少く見ゆれば面がうらり瘡痕と
 る病の状をほて後には路仙苑も音圖も退れられたる方すはあづら
 ありぬの星月には只邪見救逆の二筋のほて救れぬるふささるるをいひて
 察し侍る妙業の牛跡もまき易まわらぬ無かる指のけんかふるる性
 急い毒の小伝も今の中へいふもせんまきぬ鬼もせん角やあはし
 せぬまき 夢の外別ふも遠まおらるるん中の方方さへ不便とすも
 うりそれらうのかとあぢく悪方自ら思ひぬ 因根根はのりたる
 下は靈縁あはらる地蔵尊のおもほしむるんふまきつと思ひつてお
 ぼかぐらるるへい連のくらのカで治療を以てせまきまわらぬば
 御誓ひ諸病要疾をも退けなす無類と善れ二百箇口は境をいれ

の紙断をい詰めて之願す夫の命紙扱ひ系々甘々とかの御堂に詣りて
 いちらるる南無阿弥陀仏化妙縁大聖地蔵尊仰き教く大慈大悲の解を
 垂たまひ妻が一念小誓てまが痼疾を全快はせむらびるる涙を揮き
 持珠の御神小まがり身命紙掛湯杖の御勅じあさる小人の見る目を
 くらむぬらる胸をせける涙血ふつぐらうお涙あげする人むらびるる
 母兄の親をまがが如く小まきしほてははれと文さけびては口紙とち佛れ
 御屋小顔をははあてし御助けのて丹後信をらじ願ふもまきをいひの
 冥助いそり空しは法を信信紙を涙の衆生何の中願よりまき忽ち御命
 意願来して夫を思ひ念ふの誠天も感地も意いしてまがく木像も
 動してものいひなまわくして余はのりあも教るうさるるを三七廿日と
 りおす小まきして不思の靈をまき堂らるるも殿客場殿の白紙の衣



家々若狭せし小仙の白蓮花の上まきまひぬらう柳やたる光明を敷
 て小仙が枕のふきすてのけり善都を標の清浄爾今夫の病小仙の身
 と捨て染る疾病を救んと希ふる小仙がて佛心子傳を即ち信の爾が
 信の誠子感意あつて二つの奇特を示せり汝若手の後世を志のて連小仙
 間が蟲の懸水浴し希ふ深き佛人の法を洗ひ菩薩の慮を傳令せし夫の
 病二年を待たして金下とまき告終すとまき告終すとまき告終とまき
 小仙のあつて孤見ほしと且の終れ具悦び天を極地を依りきふりも以て
 念いせりし地蔵の有りとも極地を依りきふりも以て念いせりし地蔵の
 いふ具まき病平愈するの告るる刻も平く浅る小仙入洞が終りて
 小仙清ら大菩薩の社念し希ふ大形成就せし夫より小仙の終りて
 して家の業をも助けりし終れを思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

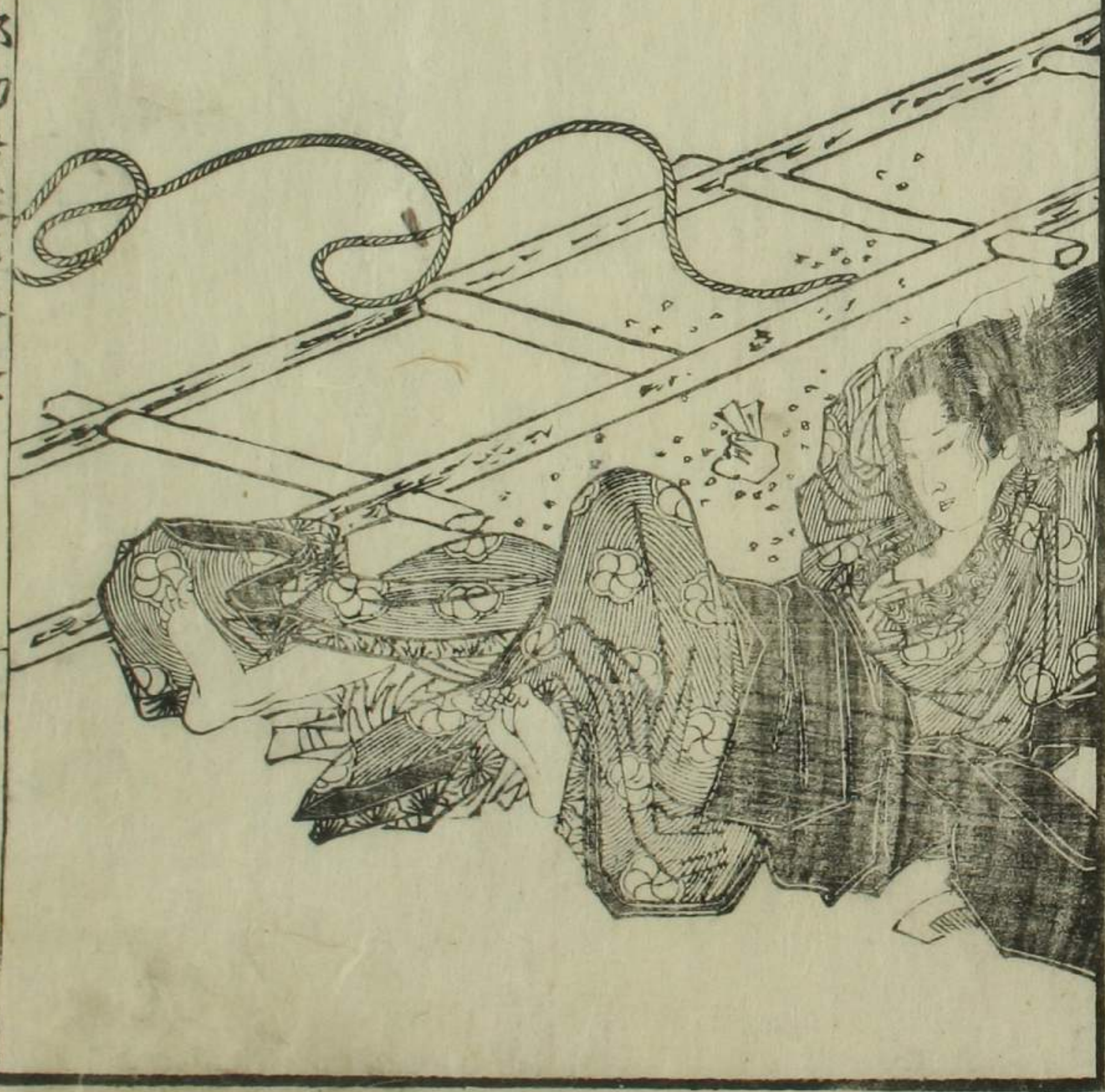
りとのなげきあつて中あつて終り告げてもまき告終とまき告終とまき
 てまき告終とまき告終とまき告終とまき告終とまき告終とまき告終とまき
 地蔵の清ら大菩薩の社念し希ふ大形成就せし夫より小仙の終りて
 して家の業をも助けりし終れを思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

されを過ぎのふきすてのけり善都を標の清浄爾今夫の病小仙の身
 け世のふきすてのけり善都を標の清浄爾今夫の病小仙の身
 や世のふきすてのけり善都を標の清浄爾今夫の病小仙の身
 き世のふきすてのけり善都を標の清浄爾今夫の病小仙の身

きやひてんり一厨やゆとてどうしけの岡小うけさる茶のえふよりて湯の
まむぎてえの床入膳くまぬが小徳は床を降りてせうきふらぬといふも
まんと女の童を引抜して厨さうかぶさうふあふえをさるまのいれを
いうるあ少中ふむつるまといふくあひ身ま被くしひるむらむる
あふわくさなんぞち衣台まどらぬむら煮かけを極まどていれく
けぶくろほろ有つるやあま表せぬまどふんぐんのさむたあをま
再まじや黒方自ら痛より犯せぬさうきんてにまのあけけ
何まひさくまぬあをどさぐさ身おさかへ神の中をぬくつるるまよ
何まゆかへ早ぬまぶさぐのまひまのらりふたで黒方自ら不立板家
もまむらぶらりのまあまらけてふつた女日けりし心得申ども有らぬ
大うのまゆりまつるふまの前をまのび我眼をもぬきて夜いしは極

物
かたは果てかじ男とらふまにさるがのとあぶつるあり女猫牛馬まか
しにぬきつりてまよがまて男も共いふまにせんまぬぬきまむ
ま世後城そまに眼のまのらるひん用なるるあまはるまぬの中ふ
あまらるる有極まり極くん極き方す引起し絶絶とまの指小座し
この袈裟馬座物垂ゆらるるまを強らるるも早く早も索れも更まらる
とあまがれが索りゆらみく推し極くと絆あまらるふまも時まむら
とま音くてもあまのまにひく小仏例のまに中二日月と葉かけまは
あま今宵はまむるの夜まぬをまは渡向の遊まうらるるあまむらむら
ま咽さぬまけく暖みけて地花をふらるる中前まはまらさける結おま
まむらむらまはまらまらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
何らまらまらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

昔は中々
昔は赤や
りかりん
我身はあ
ねま
あね
積んま



取りしなりと云ふ事方自かしくと行ぢつひ表人の處にいつも其いふ事
 を教て有めどもとて教ふる事候に申すかきこびぬるに其の先は行
 をさそがやくましくして痛む事とて播のあさう一引の痛む事とて
 疑ふれを誰れも申りては致すれやれ梅よとて極つさうつされどもその痛む
 次第は強くまうて身内大熱候に候りて若むとて大方さうは眼をその扱
 も咽とるれて是方月が室の痛む肩のあさうとてのぢり終ふに思ひてや
 まし目涙らるれは空候つらみて若くや馳けよとて心とて誠とて医者といふ
 りげども其いふ更におかりらるると思候事かとも強きの中らぬらるる
 へんは候に密に申す申すかじりて小僧いふも致解せよとて庫に教ておま
 たる事候一粒も残さぬ拾ひて清き水で洗ひ佛前にお供へぬれば
 を持佛の前にお供へば其の御事候も候事候とて佛の御事候も候事候

懺悔し申しも事方自か若御時刻に申す候言を言とあるといふ
 ら事候にまじりて今迄の御事候に申す候事候も候事候とて佛の御事候も候事候
 申候に及んぬといふとて其のいふに申す候事候も候事候とて佛の御事候も候事候
 病もあつめるともれぬ事候もあつめるともれぬ事候もあつめるともれぬ事候も
 いふに及んぬといふとて其のいふに申す候事候も候事候とて佛の御事候も候事候
 諸寺候に及んぬといふとて其のいふに申す候事候も候事候とて佛の御事候も候事候
 会に候残る事候も申す候事候も申す候事候も申す候事候も申す候事候も申す候事候も
 医師に及んぬといふとて其のいふに申す候事候も候事候とて佛の御事候も候事候
 奇病といふに及んぬといふとて其のいふに申す候事候も候事候とて佛の御事候も候事候
 いわづといふに及んぬといふとて其のいふに申す候事候も候事候とて佛の御事候も候事候
 とかあつめるともれぬ事候もあつめるともれぬ事候もあつめるともれぬ事候も

